

『文部時報』一九六〇年六月号（文部省編／帝国地方行政学会）

教科書のソースマテリアルの 入手について

矢口 新



一 国際間の相互理解を進めるために教科書の改善を考える必要があるということは、一般論としては誠にその通りである。最近日本で外国教科書の展覧会がおこなわれたが、日本人からみて、日本のことが正しく紹介されていないと痛感した人も多かったと思う。それは外国の教科書に対する問題であるが、同様のことは日本の教科書の中にもあるのではないかということは反省する必要がある。そこで正しい材料にもとづいて正しい教科書が書かれなくてはならない。

それには正しい材料をどうして手に入れ

か。こういう問題が起こってくるわけである。こういう考え方に間違いがあるわけではないけれども、入手方法を問題にする前に考えておかなくてはならぬことがある。それは改善の問題である。

ユネスコでは国際理解の見地から教科書改善の問題をとりあげている。そのために専門家会議も開かれているが、これも国によって相当に事情がちがうのである。ヨーロッパ諸国の問題と日本の問題はずいぶんちがう。またヨーロッパとアジア諸国とではまるでちがう問題をもっている。ことばの上では同じく国際理解のための教科書改善といっても、内容はいちじるしく異っている。同じく

教科書改善のためのソースマテリアルの入手といっても、その考えられているものはまるでちがうという感じがする。少なくとも現実の状態ではちがわざるを得ないのである。

先頃ヨーロッパの教科書改善に関しての専門家会議に出席したときに感じたことは、ヨーロッパで実際上問題になっていることは、教科書におけるアジアの取り扱い、ないしアジア文化の取り扱いであって、一般的に国際理解ということではなかったということである。それはヨーロッパの教科書にこれまでアジアないしアジア文化のことをほとんど取り扱っていなかったという歴史的な事情によるものである。これまでの世界のあゆみからみれば、ヨーロッパはアジアを植民地として踏まえていたのであるから、アジアの文化があるなどということすら大して問題にしなかったわけである。しかしいまや事情がかわって、もつとアジアを理解しなくてはならぬと考えるようになって、そこで教科書改善も起こってきた。それについてもアジアのことを教科書に書くには、ソースマテリアルが欲しい。そしてやれアンソロジーが必要だ、ビブリオグラフが必要だなどというところが問題になってきたわけである。

このような事情をよく知ってみるとヨ

ロッパの教科書に日本のことが正しく紹介されていないのもっともだと思う。われわれとしてはしゃくにさわることでもあるが、また考えようには、それをおこったりさわりだりするのとはおとな気ないことでもある。いつも他人が自分を理解してくれると思うのはバカげたことである。それより自分が間違いをおかさなないことを考える方がおとなである。他人のことは笑っていればよいといえよう。

日本の教科書の中にあるヨーロッパに関する記事を見ると、ヨーロッパの教科書になる日本ならびにアジアの記事とは比較にならないほど充実しているといつてよい。少なくとも詳しく正しく書くという意欲にみちている。それはファンがスターの手柄をあこれとせんさくするに似ている。スターはファンのことを問題にしないのだが。

だから国際理解をすすめるということから日本の教科書を改善するとすれば、ヨーロッパに関しては、もっとスター扱いにせず、あたりまえの人間として扱うという態度に改めるべきだという考え方もなりたつ。いままでも表むきのよいことばかり書いていたがもっとそうでないこともいふべきであるといえよう。そうするとソースマテリアルなど

も、もっと裏面のこともわかるようなものが入用となる。入手の方法を考えるようなものが入用となる。入手の方法を考えるとすればそういうものの入手方法ということになる。入手方法を考える前に考えておかななくてはならぬことというのは、こういうことである。一般的に、観念的に、ソースマテリアルの入手方法などといえば、きまりきったことしか考えられない。またもう考える必要がないということもあるのである。具体的に如何なるソースマテリアルかということが考えられてくると、その入手方法も考えられるというものである。そしてまたそういう考え方でなければ、この問題をとりあげる意味がないということである。

二

以上のような点からすると、日本の社会科学の教科書（地理、歴史も含めて）に記載されているヨーロッパ諸国のことについて書いたものを例にとつていえば、それらの内容をより正しく詳しくするために、ソースマテリアルをどう入手するかなどということはいま問題にならぬことではないだろうか。という意味は、日本には西欧研究の伝統があった、そういうソースマテリアルは集まってい

る。教科書を書く地盤としてある社会の文化のレベル、つまり日本の社会がもっている西欧社会についての知識はそうとうなものである。もちろんそれをより高くするというのもいくらでも考えられはするが、そういうことは他により重要な問題がなければということではないだろうか。もしそういう点で教科書改善の問題から考えられるとすれば、それはソースマテリアルの入手方法を考えるというより別な方式を考える方がよい。それは、ヨーロッパ各国と相互に教科書の交換をし、その内容についての分析をすることである。すなわちそれぞれの国が相手国の教科書に記載されている自分の記事について検討してみても、相互に要求を出し合ってみる。例えば一方が、ここにはこういうことを書きたいと思うが、どうか、こういう点についてはお前の国の事情はどうか、また他方は、ここはこういう風に書いた方がよいと思うがよその国のお前達がみたらどうだろうかなどと話し合ってみることである。そうしないから東南アジアのことなどは問題にならないのである。ヨーロッパの各国の童話などはいちとあらゆるものが翻訳されてもいるし、ひとびとの生活の中に入っている。東南アジアの諸民族のものは全然知らない。そういう

ものはないと思っている。教科書にもイソップなどのようにヨーロッパのものはふんだんに入っているが、東南アジアのものは入っていない。第一それを教科書に採用しようなどという気をおこす人が教科書の編集者の中にいない。いまもつとも重要なことは、アジア諸国、わけても東南アジア諸国に対する理解ということではないだろうか。そういう点の教科書の記述も何かいちばん欠けているような気がする。これは無理もない。いままでほとんどみな植民地であつて、目に入らなかつた国であるから、それらの国の歴史も、ヨーロッパの歴史とちがつてわからない。だいたい世界史といつても現在のわれわれの頭の中にあるのはヨーロッパの世界史である。何でも西欧中心に物を考え話し合いを通じて表むきのことも裏側のこともよく事情がわかり、その上で各国は自己の教科書をつくればよいではないか。

以上はヨーロッパの国々に対する理解という点から教科書改善のためのソースマテリアルの問題を考へてみたのである。一般的に国際理解ということを考えれば世界各国みな平等に取り扱われるべきであろうが、限りある力でやるとすれば、やはり多少の重点的な方法ということもあり得ると思う。そう

いうふうを考えまい。とくにどういう考え方が潜在しているかは反省してみてもよいことである。そしてそういう地盤で抽象的にソースマテリアルの入手方法ということを考えていても本当の教科書改善にならない。

日本が今後アジアと一体となつた生き方をしなくてはならぬことは火をみるより明らかであり、そういう日本人の生き方から教科書の改善も考えられてくるし、その内容もきまつてくる。そしてマテリアルもその見地から必要になるのである。入手方法というものもそこからきまつてくると思われる。

例えば東南アジア諸国の各国の面積と人口と簡単な産物だけしか教科書にはいらなという見地なら、そのマテリアルの入手方法も簡単であろう。もう特に考える必要はない。国連の統計でもあればよいことになる。しかしそれではたりない。日本がこれらの国と協調してやつていかななくてはならぬ。とくに経済開発に協力したり、技術援助をしたりすることが必要であり、中にはそれらの国々へ出かけていく国民もある。そのような今後の動向に即して国民教育を考える立場から教科書の内容を改善し、東南アジアの諸民族についてもっと詳しく知り、習慣や風俗やを子どものうちから知らせておきた

い。中には民話や童話も知らせておきたいと考えると、ソースマテリアルの入手の方法はさうとう本格的に考えられなくてはならぬであろう。

それにはまずことばの問題も解決しなければならぬ。アメリカ、ソビエトなどほさういう点も着々実行に移しているようである。ソビエトにはアジア関係の専門研究所があり、五〇〇人からの専任のスタッフを抱えて研究を開始している。こういう本格的な研究がそのまま教科書のソースマテリアルの入手方法だといつてよいと思う。日本でも最近激しくこの方面の研究が認められて、アジア地域の組合研究が片手間ではあるが行なわれはじめた。本当の所は専門の学者の間でもまだ大したことはわかつていないのだから、教科書のマテリアルなどはでてこないのが当然だといえはいるのである。それにしても東南アジアに関しては、ソースマテリアルは、そういうところにあるといえよう。

ソースマテリアルの入手ということも以上のように考えると、たいへんな問題だといふことができるであろう。形式的に考えられることではないのである。

(国立教育研究所)